

1 今年度の分科会について

今年度は昨年度同様に会場とオンラインのハイブリッドで実施した。会場2名、オンライン1名の参加であった。オンライン参加者は、遠方からの参加だったので、オンラインのメリットが発揮された反面、作品をカメラ越しに見ることになるので、オンライン参加者の要望にかなったかどうか不安ではある。

2 「変わりゆく環境下でも変わらない、アタシのマインド」砂川高校 中谷 幸代

教育課程の変更に伴って、中谷氏の担当教科・科目の変更があり、また教科が国語と芸術の二つにまたがるなど書道科教員の特殊性と、職場同僚とのかかわりなどにかかわる報告であった。自分ではどうにもできないことが多くても、書教育の質の高さを維持している中谷氏の信念の強さがうかがえ、教える側の情熱が子どもの学びにとって重要なものなのだとしみじみ感じられた。

3 「清明小学校 & 北陽高『文字で繋がるプロジェクト』～書で伝える・書で感じる～」

以前、一度この分科会に参加していただいた石上氏の報告は、前回の報告にあった新設科目「書道研究」での実践報告だった。選択科目にありがちな、選択者の学習意欲の低い生徒もいるなかで、近隣小学校における出前授業を「文字で繋がるプロジェクト」と名付け、高校生が小学生を指導・援助することで授業者(高校生)の学び、成長につなげる素晴らしい取り組みであった。

釧路市に新任で赴任したため、4年をめどに転勤しなければならない石上氏だが、このような素晴らしい実践ができるのは本当に素晴らしい。次の勤務先における実践についての報告にたいへん期待している。

4 「2年目のもやもや」苫小牧南高校 磯角 広一

「学び合い」の手法を活用した授業実践の報告を行った。生徒の自主性を育むため、生徒相互の援助が出来るように生徒の立ち歩きを認め取り組みをすすめている。技術的なことを出来る生徒が、出来ない生徒を援助することで生徒同士の結びつきを強め、他を教えることでその生徒の学習した内容の確認と出来ない生徒が出来ないことを出来るようになることがねらいである。

ながらく実践してはいるが、学習意欲の低い子どもたちの意欲喚起がうまくできない、交流の場面を増やせないなど、なかなか厳しい状況も続いている。今後も報告したい。

5 まとめ

今年度は「楽しい」が学びの原動力になることを再確認できた会となった。子どもたちは「できる喜び」を知って、さらに困難な課題に挑戦したくなるのだから、それを実感できる書教育に携われることは教員として大きな喜びである。

3人の参加であったが、2人と3人では1人違うだけだが、私たちの学びの質と量はまったく違い、学ぶ楽しみを再認識できた。今回の参加者におおいに感謝したい。

参加者の感想

文責: 釧路北陽高校 石上結愛

本日の分科会を通して、書教育において大切なのは「型を教えること」だけでなく、目の前の生徒一人一人の現状や感じ方に寄り添うことだと感じた。生徒によって興味を持つきっかけや表現の仕方は異なり、それぞれに合った関わり方を考える必要があると学んだ。

また、書の指導は「こうあるべき」という固定観念に縛られず、もっと自由に表現を認めることが、生徒の意欲や創造性を引き出すことにつながると実感した。

今後は、生徒が自分の書を通して自己表現の喜びを感じられるような授業づくりを目指したい。